昔の女

三島霜川

青空文庫

埃深い北向の家である。低い木ッ葉屋根の二軒長屋で、子供の多い老巡査が住み荒して行ッた後だ。四畳半と三畳と並んで、其に椽が付いて南に向ッてゐる。で日は家中に射込むて都て露出し……薄暗い臺所には、皿やら椀やら俎板やらしちりんやらがしだらなく取ツちらかツてゐるのも見えれば、屡く開ッ放してある押入には、蒲團綿やら襤褸屑やら何んといふこともなくつくね込むであるのも見える。障子は夏、外したまゝで、残らず破れたなり煤けたなりで便所の傍にたてかけてある。もう朝晩は秋の冷気が身に沁むほどだといふに、勝見一家の倦怠とやりツぱなしは、老巡査一家の其にも増して、障子を繕ツて入れるだけの面倒も見ない。雨でも降るとスッカリ雨戸を閉切ツて親子四人微暗い裡に何がなしモゾクサしていじけ込むてゐる。天気の好い日でも格子戸の方の雨戸だけは閉切ツて、臺所口から出入してゐる。幾ら水を換へて置いても、雨上りには屹度、手水鉢の底に蚯蚓が四五匹づゝウヨ〳〵してゐた。家が古いから屋根から流れ込むのであらう。主人の由三は、卅を越した年を尚だ独身で、萬事母親に面倒を掛けてゐた。

由三は何処に勤めるでもない。何時も何か充らないやうな、物足りぬ顔で大きな古机の前に坐り込むでゐるが、飽きるとゴロリ横になツて、貧乏揺をしながら何時とはなく眠ツて了ふ。何うかすると裏の田園に散歩に出掛けることもある。机の上には、いかな日でも原稿用紙と筆とが丁と揃ツてゐないことはないが、それでゐて滅多と原稿の纏ツた例がない。頭がだらけきツて、正體がないからだ。

今日も由三は十一時頃に起きて、其から二三時間もマジリ〳〵してゐて、もう敷島の十二三本も吸ツた。吸殻は火鉢の隅に目立つやうに堆になツて、口が苦くなる、頭もソロ〳〵倦くなツて來て、輕く振ツて見ると、后頭が鉛でも詰めてあるやうに重い。此うなると墨を磨るのさへ懶い、で、妄と生叭だ。臺所傍の二畳でも母親が長い叭をする……眼鏡越しに由三の方を見て、

「隣りのお婆さん、何うなすツたかナ。」と獨言のやうにいふ。返事がなかツたので、更に押返して

「亡くなツたかナ。」

と頼りなげな聲だ。

「何うだツて可いぢやありませんか、他のこと。」

由三はうるさゝうに謂ツて、外を見る。青い空、輝く日光……其の明い、静な日和を見ると、由三は何がなし其の身が幽囚でもされてゐるやうな感じがした。

「でも怖いからノ。」と母親は重い口で染々といふ。

「氣を付けてさへゐたら大丈夫です。」

「其は然うだがノ。」と不安らしい。

「大丈夫ですよ。赤痢といふものは、氣を付けてさへゐたら、決して罹りもしなければ、傳染するものではありません。」

「然うかノ。」

と謂ツて母親は黙ツて了ツた。隣りの婆さんといふのは、赤痢に罹ツたのを一週間も隠匿してゐて、昨日の午後避病院に擔込まれたのであツた。避病院は、つい近所にある。坐ツてゐても消毒室の煙突だけは見える。

「嫌だノ。」と母親はまた心細さうに、「今年は能く人が死なツしやるナ。気候の悪い故でもあるかノ。」

と謂ツて小聲で念佛を稱へる。

「そりや死にもするけれど、生れた家も随分あるさ。」

と由三はお産のあツた家を六軒ばかり數へた。そして、「此の長屋中にだツて、春から三人も生れたぢやありませんか。」

と言足した。近所から傳染病が出た故でもあることか、其處らに人が住むでゐるとは思はれぬやうに靜だ。其の靜な中に、長屋の隅ツこの方から、トントン、カラリ……秋晴の空氣を顫はせて、機を織る音かさも田舍びて聞えて來る。

由三は眼を瞑ツて、何んといふ纏のないことを考出した。「此うしてゐて何うなるのだ。」と謂ツたやうな佗しい感じが、輕く胸頭を緊付ける。

母親は何やらモゾクサしてゐて、「私もナ、ひよツとすると、此の冬あたりは逝くやも知れンてノ。」と他言のやうに平気でいふ。

由三は惘ツとして眼を啓けた。

「え、何うして？……」と詰るやうにいふと、

「理窟はないけれどナ、何んだか其様な氣がしてならんでね。」

「今死んで何うするんです。」

「何うするツて、壽命なら爲方がないではないかノ。」

と淋しく笑ふ。成程然ういふ母親は、此の秋口から慢性の腎臟病に罹ツて、がツくり弱込むで來た。顏にも手足にも、むくみが來て、血色も思切ツて悪くなツた。で何事に依らず氣疎くなツて、頭髪も埃に塗れたまゝにそゝけ立ツて、一段と癈が甚く見える。そして切と故郷を戀しがツてゐる。國には尚だ七十八にもなる生みの母が活きてゐるのでお互に達者でゐる間に一度顏を合はせて來たいといふのであツた。

別れてから十四年にもなる。母親には故郷が甚だ遠くなツてゐた。で自分にも告々と老が迫ツて來るのにつれて、故郷の老母を思ふ情が痛切になツて、此の四五年北の空をのみ憧れてゐる。由三は能く其の心を了解してゐた。そしてウンと氣張ツて、歸國させるだけの金を作らうと奮發しても見るのであツたが、何時も何か眼前の事情に計画を崩されて其が成立たずに了ふ。一ツは底疲のしてゐる由三の根氣の足りぬ故もあツたらう。近頃では、由三はもう、歸國させるといふことを考へるのも懶くなツた。其を考へたり言出されたりすることが嫌で〳〵耐らぬ。して何うかすると母親の顏を見るさへ不快でならぬこともあツた。

話が途断れると、屋根の上をコト〳〵と鴉の歩き廻る音がする…由三は鉛のやうな光彩すらない生涯を思浮べながら、フト横に轉がツた。天床、畳、壁、障子、襖、小さな天地ではあるけれども、都て敗頽と衰残の影が、ハツキリと眼に映る。と氣が激しく燥々して來て凝如としてゐては、何か此う敗頽の氣と埃とに體も心も引ツ括めて了ふかと思はれて、耐らなく家にゐるのが嫌になツて來た。淋しいといふよりは、空乏の感じが針のやうに神經をつゝく。それでも思切ツて家を飛出す踏切もなかツた。

「もう何うすることも出來なくなツて了ツたんぢやないか。」

圧されてゐるやうな心地だ。ドン底に落ちてゐるといふ悲哀が襲ふ。

濕氣のある庭には、秋の日光が零れて、しツとりと閃いてゐた。其處には青い草が短く伸びて、肥料も遣らずに放ツたらかしてある薔薇と宮城野萩の鉢植とが七八並んで、薔薇には、小さい花が二三輪淋しく咲いてゐた。隅の方には、葉の細い柿の樹が一本、くの字形にひよろりとしてゐる。實らぬ柿の樹だ。其の下に地を掘ツた向ふ

の家の芥溜が垣根越しに見える。少し離れて臺所も見える。其れも長屋で、襤褸の干してあるのも見えれば、厠も見えて、此方では向ふの家の暴露された裏を見せつけられてゐるのであツた。向ふの側にも柿の樹があツて、其には先ツぽの黄色になつた柿が枝もたわゝに實ツてゐた。柿の葉は微に戰いで、チラ〳〵と日光が動く。

　由三は何時かウト〳〵してゐた。ホガラ〳〵した秋の暖さが體に通ツて、何んだか生温い湯にでも入ツてゐるやうな心地……、幻から幻へと幻がはてしなく續いて、種々な影が眼前を過ぎる、……只見ると、自分は、ニコライ堂のやうな高い〳〵塔の屋根に登ツて躍ツたり跳たりしてゐる。其の下に幾百千とも知れぬ顔がウヨ〳〵して其の狂態を見物してゐる。何れも冷笑の顔だ。其に激昂して、いよ〳〵躍り狂ふ……、かと思ふと、足を踏滑らして眞ツ逆さま！……、落ちたかと思ふと落ちもしない。翼が生えたやうに宙にフワ〳〵して、何か知ら金色の光がキラ〳〵と眼の先に煌く。と、其が鋭利な刃物になツて眼の中に突ツ込むで來る。其處で幻が覺めかゝツて、強く腕の痺を感じた。腕を枕にしてゐるからだと氣が付いたが、それでゐて寢返りを打つことも爲なかった。痺れるだけ痺れさせて置く氣だ。指先から肘にかけて感覺も何もなくなった頃に、由三は辛而眼を啓けた。

　痺れきツた腕を摩りながら、徐ら起上りざま母親はと見れば、二畳に突ツ俯したまゝスウ〳〵鼾を立てゝゐる。神棚、佛壇、時計すらない家は荒涼してゐた。

由三は何がなし小腹が立ツて來て、「阿母さん。」

　と慳貪に呼掛けた。そしてツト立起りながら、ドシンと畳を踏鳴らした。別に用もなかツたが、たゞ起きてゐて貰ひたかツたのだ。フラ〳〵と椽に出て見る。明い空、明い空氣、由三は暗い心の底の底まで照らされるやうな感じがした。

「出掛けて見やうかナ。」

と思ツて机の前へ引返すと、母親は鈍い眼光で眩しさうに此方を見ながら、

「何けえ。」とノロ〳〵いふ。

「何ツて、もう晝寢をする時節でもないでせう。」と皮肉に謂ツて、

「私、些と本郷まで行ツて來ますよ。」

「本郷まで……、何しにノ。」

「肉でも購ツて來やうと思ツて…。」

「肉をナ。」

「え、少時肉の味を忘れてゐますからね。」

　由三の眼には今肉屋の切臺の上にある鮮紅な肉の色がハッキリと見えて、渇いた食慾は切に其を思ふ。で思切ツて家を出ることにしたが、一ツは荒れきツた胸に賑な町の空気でも呼吸させたらばと思ツたからだ。

　少時すると由三は、薄茶のクシャ〳〵となツた中折を被ツて、紺絣の單衣の上に、丈も裄も引ツつまツた間に合せ物の羽織を着て、庭の方からコソ〳〵と家を出た。何やら氣が退けて、甚く其處らを憚りながら、急足で長屋の通路を通り抜けると……兩側に十軒の長屋が四軒まで空家になってゐて、古くなツた貸家札は、風に剥がれて落ちさうになツてゐた。井戸の傍を通ると、釣瓶も釣瓶縄も流しに手繰り上げてあツて、其がガラ〳〵と干乾びて、其處らに石灰が薄汚なくこびり付いてゐた。

　避病院の横手を通ツて、少し行くと場末の町となる。其處で病院

に擔込む釣臺に出會した。石灰酸の臭がプンと鼻を衝く。由三は何んとも謂はれぬ思をしながら、と、振向いて見ると、蔽の下に血の氣を失ツた男の脚が見えた。足の裏は日に照ツて変に白くなツてゐた。少時行くと、路の兩側に墓場がある、××寺第三號墓地と書いた札などが目に付いた。晝でも薄暗い路だ。片側の墓場は大きなペンキ塗の西洋館で切れる。眞言宗中學林の校舎だ。洋服を着た徒弟等が十五六人、運動場に出て盛にテニスをやツてゐた。

　間もなく路は明くなツて千駄木町になる。其から一家の冬仕度に就いて考へたり、頭の底の動搖や不安に就いて考へたり、書かうと思ふ題材に就いて考へたりして、何時か高等學校の坡のところまで來た。また墓場と寺がある……、フト、ぐうたらなる生活狀態の危險を思ツて慄然とした。

　坡について曲る。少し行くと追分の通だ。都會の響がガヤ／〃＼と耳に響いて、卒倒でもしさうな心持になる……何んだか氣がワク／＼して、妄と人に突當りさうだ。板橋通のがたくり馬車が辻を曲りかけてけたゝましく鈴を鳴らしてゐた。俥、荷車、荷馬車、其が三方から集ツて來て、此處で些と停滯する。由三は此の關門を通り抜けて、森川町から本郷通りへブラリ／〃＼進む。雜踏の中を些と古本屋の前に立停ツたり、小間物店や呉服店をチラと覗いて見たりして、毎のやうに日影町から春木町に出る。二三軒雜誌を素見かして、中央會堂の少し先から本郷座の方に曲ツた。何んといふことはなかツたがウソ／＼と本郷座の廣ツ場に入ツて見た。閉場中だ。がもう三四日で開くといふことで、立看板も出て居れば、木戸のところに來る××日開場といふビラも出てゐた。茶屋の前にはチラ／＼光ツてゐる俥が十二三臺も駢んで何んとなく景氣づいてゐた。由三は何か此う別天地の空氣にでも觸れたやうな感じがして、些と氣が浮ついた。またウソ／＼と引返して電車路に出る。ヤンワリと風が吹出した。埃が輕く立つ。

　何處といふ的もなく歩いて見る氣で、小さな時計臺の下から大横町に曲ツて、フト思出して、通りから引込むだ肉屋で肉を購ツた。そして其の通を眞ツ直に壱岐殿坂を下ツて砲兵工廠の傍に出た。明い空に渦巻き登る煤煙、スク／＼と立つ煙突、トタン屋根の列車式の工場、黒ずむだ赤煉瓦の建物、埃に塗された白堊、破れた硝子窓、そして時々耳をつんざくやうに起る破壊的の大響音……由三は其の音其の物象に、一種謂はれぬ不愉快と威壓を感じながら、崩れかツた長い長い土塀に沿ツて小石川の方に歩いた。眞砂町、田町、川勝前から柳町にかけて、其の通には古道具屋が多い。由三は道具屋さへあると、些と覗いて見たり立停ツて見たりする癖がある。別に購ふ氣もないが、値段づけてもしてあると其も見る。カン／＼日の照付るのを嫌ツて、由三は何時か日の昃ツた側を歩いてゐた。

　フト小さな古道具屋の前で立停ツた。是と目に付く程の物もない、がらくた物ばかりコテ／＼並べ立てた店である。前通には皿や鉢や土瓶やドンブリや、何れも疵物の瀬戸類が埃に塗れて白くなつてゐた。漆の剥げた椀も見える。其の薄暗い奥の方に金椽の額が一枚、鈍い光を放ツてゐた。紫の羽織を着た十五六の娘の肖像畫だ。描寫も色彩も舊式の油繪で、紫の色もボケたやうになつて見えたが、何か熟と仰ぎ見てゐるやうな眼だけは活々としてゐた。頬、鼻、口元、腮、都て低く輪廓が整ツて、何處か何んとかいふ有名な藝者に似て豊艶な顔だ。

「あヽ、那女だ……」と由三の胸は急にさざめき立つた。

確に昔の女の顔だ。で由三は些と若い息でも吹込まれたやうな感じがして、フラ〳〵と裡に入ツた。微に手先を顫はしながら、額を取上げて、左見右う見してゐて、

「こりや若干錢だね。」と訊ねた。聲が調子外れて、腦天からでも出たやうに自分の耳に響いた。

「其ですかえ、そりやね。」と些と言を切ツて、「一圓卅錢ばかりにして置きませう。」と賣ツても賣らなくつても可いといふ風で、火鉢の傍を動かずに此方を見てゐる。年の頃四十五六、頬の思切つて出張ツた、眼の飛出した、鼻の先の赭い、顔の大きな老爺だ。

「フム。」と少時黙ツてゐて、「負からんかね。」

「然うですね、澤山のことは可けませんが……」とシブ〳〵立起ツて店に下りて來た。額を手に取ツた。して額椽の箔が何うの畫の出來が何うのと、クド〳〵と解らぬ講釋を並べて、「拾錢もお減き申して置きませうかね。」と無愛想にいふ。

「拾錢ぢや爲樣がない、八拾錢で可いだらう。」とぐづついていふ。

「ぢや、もう拾錢購ツて下さい。」

それで相談が纏ツて、由三は殆ど蟆口の底をはたいて昔の女の肖像畫を購取ツた。そして古新聞で畫面を包むで貰ツて、それをブラ下げながらテク〳〵歩き出した。氣が妙に浮ついて來て、フワ〳〵と宙でも歩いてゐるかの心地。で車の響、人の顔、日光に反射する軒燈の硝子の煌き、眼前にチラ〳〵する物の影物の音が都て自分とは遠く隔ツてゐるかと思はれる。彼や是と思出が幻のやうに胸に閃く。彼は其を心に捕へて置いて、熟と見詰めて見るだけのゆとりとてもなかツた……、閃めき行くまゝだ。

女は綾さんと謂ツた。始めて知ツたのは由三が十四五、女が十一二の頃で、其の頃由三は叔父の家に養はれてゐた。叔父は其の時分五六人の小資本家と合同して、小規模の麥酒釀造會社を經營中であツたが、綾さんは屡く叔父の家に來た。綾さんの父は、川越の藩士で、明治七八年頃からづツと通信省の腰辨は腰辨でも、其の頃の官吏だからナカ〳〵幅も利けば、生活も樂にしてゐたらしい。處がフト事業熱に浮かされて、麥酒釀造の仲間に加はツた。合同資本と謂ツても、其の實田舍から出たての叔父と綾さんの父とが幾らか金を持ツてゐたゞけて、後は他の懷中を的の、ヤマを打當やうといふ連中の仕事だ。其の道の技師を一人雇ふでもないヤワな爲方で、素人の釀造法は第一回目からして腐ツて了ツた。それで叔父も財産を煙にして了へば、綾さんの父も息ついて、會社は解散。綾さんの家は西方町の椎の木界隈の汚い長屋に引込むで、一二年は恩給で喰ツてゐたが、それでは追付かなくなツて、阿母さんの智慧で駄菓子屋を始めた。其でも綾さんは尚だ何時も紫のメレンスの羽織を着て、頭髪から帶、都て邸町の娘風で學校に通ツてゐた。加之顏立なり姿なり品の好い娘であツたから、設や紫の色が洗ひざれてはげちよろけて來ても、さして貧乏くさくならなかつた。

三年ばかり經ツた。叔父の家では、六丁目の或る寺内の下宿屋をそツくり其のまゝ讓受けて馴れぬ客商賣を始めることになツた。すると綾さんは風呂敷包にした菓子箱を抱込むで毎日のやうに駄菓子を賣りに來た。頭髪は桃割に結ツて、姿の何處かに癈れた世帶の苦勞の影が見えたが、其でも尚だ邸町の娘の風は脫けなかツた。上品ではあツたが、口の利方は老せた方で、何んでもツベコベと僥舌ツたけれども、調子の好かツた故か、他に嫌はれるやうなことはなかった。加之擧止がおツとりしてゐたのと、割合に氣さくであツたの

と、顔が綺麗だツたのとで、書生さん等は來る度に、喰はずとも交々〳〵幾らかづゝ菓子を購ツて遣ツた。無論由三も他の小遣を節約して購ツた。そして綾さんは、時とするとゆツくり構込むで種々〳〵なことを話す。例へば近頃些々〳〵或る西洋畫家の許へモデルに頼まれて行くことや、或るミッションのマダムに可愛がられて、銀の十字架を貰ツたり造花や西洋菓子を貰ツたりすることや、一家路頭に迷はせるばかりにした麥酒釀造仲間の山師連の憎くてならぬことや、親切にして呉れる近所の奥さん等の心の悦しいことや、然うかと思ふと阿母さんが父に内密で日濟の金を借りて困ツてゐること、其の父が毎日鶯と目白の世話ばかりして、何もせずにブラ〳〵してゐるのに困ることなどを其から其へと話しつづけて、さも分別のあるやうに欝込むでゐることなどもあツた。して其の冬には、父は心臓に故障のある體をお邸の夜番に出たと聞いたが、其から間もなく由三は、故郷に歸らなければならぬ事になツて、三年ばかり綾さんを見る機會がなかツた。

四年經ツた。由三は父に死なれて、尚だ廿を越したばかりの年を家の柱となツて、一家殘らず東京に出た。東京ではポツ〳〵白地を着てゐる人を見受ける頃であツた。先づ叔父の家に落着いて、其となく蓮沼＝綾さんの家の姓だ＝の家の様子を聞くと、皆達者でゐるが、相變らず貧乏で、近頃小さな氷屋を始めて、綾さんは鉛筆を製造する工場の女工になツてゐるといふことであツた。由三は何んといふ意味もなく、たゞ靜な邸町に住はうと思ツてゐたので、家を探しがてら綾さんの家の前を通ツた。そしてフラ〳〵と立寄ツて見る氣になツた。家は以前から見ると、づツと癈頽して、今にも倒れるかと思はれるやうに傾いてゐた。たゞ葡萄棚だけが繁りに繁ツて、小さな薄暗い家を奥深く見せてゐた。葡萄園を葭簀で圍ツて氷店にして、氷をかく臺もあればサイホンの瓶も三四本見えた。棚には葡萄酒やら苺水やらラムネの瓶やら、空罐にペーパだけ張ツた、罐やらが二三十本も並べてあツて、店頭には古ゲツトを掛けた床几の三ツも出してあツた。綾さんは店頭に盥を持出して、ジヤブ〳〵何やら洗濯をしてゐた。見ると様子がスッカリ違ツてゐる。中形の浴衣を着てゐたが、帶の結び方、頭髪、思切ツて世話に碎けてゐた。

由三の姿を見ると、呆氣に取られた體で、「まあ、由さん、何うなすツたの。」

と謂ツたが、音の出方まで下司な下町式になツて、以前凛とした點のあツた顔にも氣品がなくなり、何處か仇ツぽい愛嬌が出來てゐた。たゞパッチリして眼だけは、處女の時其のまゝの濕みを有ツて、活々〳〵として奈何にも人を引付ける力があツた。

家の裡には矢張鳥籠が幾ツもかけてあツて、籠を飛廻ツてゐる目白の羽音が、パサ〳〵と靜に聞えた。前からある時計もチクチク鈍い音で時を刻むで、以前は無かツた月琴の三挺も壁にかゝツてゐた。

父は火鉢の許に坐ツて、煙草を喫しながらジロリ〳〵＼由三の様子を瞶めて、ちよツくら口を利かうともしない。そして時々ゴホン〳〵＼咳込むで、蒼ざめた顔を眞ツ紅にしてゐた。前から無愛想な人だ。顔にはむくみが來てゐた。

由三は、其の甚く衰弱してゐるのを見て、

「お悪いんですか。」と訊くと、

「あ、」と横柄に謂ツテ、「肺に熱を持ツたといふことでな。」と平氣で謂ツてケロリとしてゐる。

「可けませんナ。」

と顔を顰めると、

「何有」と被せて「養生さへすれば可いといふことだが、何分家が此の通ぢやて、思はしく行かんのでナ。」

と隔なく謂ツて苦笑する。

娘や家内は浴衣がけてゐるといふに、これはまた尚だ木綿の黒紋付の羽織に垢づいた袷で、以前の通り堅くるしい態をしてゐた。

由三は何がなし冷い手で胸を撫でられるやうな心地がした。

綾さんには男の兄弟といふがなかツた。妹が両人あツて、次の妹はお兼と謂ツて、姉にも優ツて美しかツた。もう十六になツたといふ。其は近頃印刷局に通ツてゐるとのことであツたが、末ツ子のお芳といふのは、大した駄々ツ子で、九ツにもなツて尚だ母親の膝の上に乗ツて、萎びかゝツた乳をさぐツてゐるといふ風であツた。母親は氣の好い人で、開けひろげた胸を芳坊にいじらせながら、早口にクド〳〵と貧乏話を始めた。そして由三が家を探しに來たことをいふと、綾さんと兩人で、那處は何うの此處は何うと、恰で親族の者が引越して來るとでもいふやうな騒をする。父は一切沒交渉で、其の話が始まるとプイと立ツて縁側に出て、鶯に遣る餌を摺ツてゐた。

結局綾さんが案内に立ツて、近所の空家を探すことになツた。そして適當な家を目付けて、其を借りることになツたが、敷金家賃其の他一切の話合は都て綾さんが取仕切ツて、由三は只其の後について挨拶するだけであツた。で由三は、餘りに綾さんの世馴れた所置振り、何んとも謂はれぬ一種の不快を感じた。其でも左に右話が定ツて、由三の一家は直に其の家へ引越した。して其の當座、兩人はこツそり其處らを夜歩きしたり、また何彼と用にかこつけて彼方此方と歩き廻ツて、芝居にも二三度入ツた。其は然し、二月ばかりの間で、兩人の関係は何時とはなく疎々しくなツた。其でも綾さんは毎日のやうにやツて來て、母や妹と一ツきりづゝ話して歸ツた。何うかすると工場の歸りだとか謂ツて、鉛筆の心の粉で手を眞ツ黒にしながら、其を自慢にしてゐるやうなこともあツた。兩手共荒れて皹の切たやうになツて、そしてカサ〳〵してゐた。言にしろ姿にしろ其の通で、何んでもあけすけにさらけ出して、世帶の苦しいことが口に付いてゐた。で臆面もなく米も借りに來れば小遣も借りに來た。此方に都合があツて、質屋の事でも相談すると、オイソレと直に受込むで、サツサと自分で出掛けて來て呉れる、見得も外聞もあツたものでない、此方で頼むのに極の惡いやうなことでもいふと、「何有、何處のお家だツて然うですわ。幾ら玄関を張ツてゐらしツても、此の邊のお家で質屋の帳面の無い家と謂ツたら、そりや少ないわ。」と低聲に謂ツて、はしやいだ笑方をする。

綾さんは近所の家の世帶を軒別に能く知抜いてゐた。そして其家此家の質使をすることを平氣で吹聽した。かと思ふと茶屋女のやうな、嫌味に意氣がツた風をして、白粉をこツてり塗りこくツて、根津や三崎町あたりの小芝居に出てゐる役者の噂をしてホク〳〵してゐることもあツた。蔭沙汰では根津の下廻りの後を追駈け廻してゐるといふことも聞いた。

氷店は春の間ひツそりとして、滅多と人の入ツてゐることがなかツた。母親は能く居眠をしてゐる、父は何時も火鉢の傍で煙草を喫しながらゴボ〳〵咳をしてゐる、芳坊は近所の男の子の仲間に入ツて、カン〳〵日の照付ける大道で砂塗になツて遊んでゐた。が夜となると、店の景氣がカラリと變る。綾さんも兼さんも、綺麗にお

化粧をして店に出てゐる頃には、一人または二人づゞ若い書生さん等が集ツて來て、多い時には八九人も頭を揃へて何やらガヤ〳〵〳〵騒いでゐた。何れも定連だ。そして月琴を彈く者もあれば、明笛を吹く者もあり、姉妹がまた其がいけたので、喧しい合奏は十一時十二時まで續いた。母親はこツそり其の騒を脱けて翌日の米の心配に來たことも往々あツた。由三は他に若い血を躁がせて歩くところが出來たので、決して其の仲間に加はらなかツた。して冷ツこい眼で傍觀者の地位に立ツてゐた。

秋になツた。氷店はスツカリさびれて、夜集ツて來る定連も少なくなツた。秋が深くなるにつれて、父の衰弱も目に立ツたが、一家の癈頽も目に立ツて、綾さんはせツせと工場に通ひ出した。で綾さんの手は何時も鉛筆の粉で眞ツ黒になツてゐた。其でも滅多と鬱いだり悄氣たりしてゐるやうなことはなかツたが、何うかするとツク〳〵〳〵と、「阿父さんが那如してゐたんぢや、幾ら稼いだツて到底遣切れやしないわ。寧もう家を飛出して了はうかも思ふこともあるけれども……」と謂ツて歎息してゐた。然うかと思ふと、ノンキに根津の替りを見て來た狂言の筋を話したり役者の噂をしたりして獨ではしやいでゐることもあツた。然う此うするうちに綾さんに婿を取るといふ話が持上ツた。婿は綾さんの出てゐる工場の職工で、先方から望むで貧乏な家に入らうといふのであツた。無論綾さんの容貌を命にして來る婿だ。綾さんも滿更でもなかツたらしい。で、其の話の進行中に由三は一家を提げて下谷の七軒町に引越した。そして綾さんの家との交通は、ふツつり絶えて了ツた。

其から四五年も經ツて、由三は一度本郷通で綾さんに遇ツたことがある。十月も半ばであツたが、綾さんは洗ひざれた竪縞の單衣でトボ〳〵と町の片側を歩いてゐた。何處か氣脱のした體で由三が眼前に突ツ立ツても氣が付かなかツた。で聲を掛けると、ソワ〳〵しな不安な眼光で、只見で置いて、辛面にツこりして挨拶をするといふ始末。家はと訊くと、越ケ谷の方に行ツてゐるといふ。そこで些と立話に一家の事情を訊くと、那から間もなく父は死んで了ふ、婿といふのが思ツたより意久地がなくツて、到底一家を支へて行く力がなかツたばかりか、病身で稼が思ふやうでないで、家が始終ゴタ〳〵する。するうちにお兼は定連の一人と出來て神戸の方へ駈落ちして、彼方で世帶を持つ。家は益々遣切れなくなツて、遂々世帶を疊むで了ふ、芳坊は川越の親類に預かツて貰ふ、母親は東京で奉公することになる、自分等は世帶を持つ工面の出來るまで越ケ谷に引込むことになツて、一家は全く離散の運命に陥ツて了ツた。して今日は、母親が奉公先で病ついたといふとで、取る物も取りあえず久しぶりで東京に出て來たとのことであツたが、然ういふ自身も、世帶の癈か、それとも病氣か、頭髪は地色の見えるまで薄くなり、顔も蒼ざめて、腫物の痕の見えた首筋には絹のハンケチを巻付けてゐた。そして聲は變に喉に引ツ絡むで、色も匂も失せた哀な姿となツてゐた。

由三は只聞いたまゝで別れて、格別同情も寄せなかツた。でも二三日は影の薄くなツた綾さんの姿を胸に活かして、變な氣持になツてゐた。併し直に忘れて了ツて、ついぞ思出して見るやうなこともなかツた。して其の後全く消息も絶えて了ツた。

由三は然う謂ツたやうな過去の事象を胸に描いたり消したりして、フラ〳〵と歩き續けた。紫の羽織を着てゐた頃の綾さんの姿を思浮

べると、遖に胸頭に輕い痛みを感ぜぬでもなかツた。叔父に「娶ツたら何うだ。」と謂はれたことなども思出した。兩人共夢を見て＝意味も姿も違ツてゐるが＝活きてゐたことなども考へた。

由三は何時か白山の森の中に入ツて、境内をグルリと廻ツた。森の中の空氣はしんめりとして冷たかツた。其處は始めて綾さんの手を握ツて、其のカサ〳〵してゐるのに驚いたところだ。して今は自分の心のカサ〳〵してゐるのに驚いた……其の思出の深い地を踏むでゐるからと謂ツて、由三は何んの感じにも味にも觸れなかツた。矢張飽々した心の底から、何か切に空乏を訴へて、ツク〳〵と自分の生の凋落を思ツてゐた。

何しろ家へ歸るのが嫌だ！埃深い癈頽の氣の漂ツた家に歸ると、何時でもドン底に落込むだやうな感じがする……其の感じが嫌だ！で外さへ出ると、少時でも其の感じから脱れてゐやうとする。今日も其だ。由三は無意味に神樂殿の額を見たり、拜殿の前に突ツ立ツたり、または白旗櫻の碑を讀むだりして時を経てゐた。そしてもう何も見る物もなくなツた時分に、ウソ〳〵と森を出て、御殿町の方へ上ツた。其から植物園の傍の道を通ツて氷川田圃に出た。只ある工場の前に出ると、其は以前鉛筆を製造する工場であツたことを思出した。そして其の門、其の邊の路、何れも綾さんが毎日通ツた其であることを思ツた。たゞ思ツただけだ。由三は何がなし其の乾いた心が悲しくなツた。

フト軽い寒氣が身裡に泌みた。見ると日光は何時か薄ツすりして、空氣も空も澄むだけ澄みきり、西の方はパツと輝いてゐた。其處らには暗い蔭が出來た。由三はブラ下げてゐる肖像畫の重みが腕にこたへて來て、幾度か捨て了ふか、さらずば子供にでも呉れて了はうかと思ツた。で今更なけなしの錢をはたいて購ツたのが悔られもする。かと思ふと、故郷に歸ツてゐた頃、切りと綾さんのことを思出してゐた其の時分のことが懐しいやうにも思ツた。

また小時フラ〳〵と歩續けた。そして林町から巣鴨通に抜けて、癲癩病院の赤煉瓦の土塀に沿ツて富士前に出た。動坂に入ると、其處らがもう薄々と黄昏れて、道行く人の吐く息が目に付いた。霧の深い晩景であツた。高い木立の下を抜けると、家並が續く。冷たさうな火影が、ボンヤリ霧の中にちらついて、何の家もひツそりしてゐた。由三は腹をペコ〳〵に減らして、棒のやうになツた足を引摺りながらコソ〳〵と町を通ツた。そして何んの爲に的もなくウロ〳〵歩き廻ツたかを疑ひながら長屋の總門を入ツた。何んだか穴にでも入るやうな心地がした。地はしツとり濕ツて、井戸のあたりには灰色の氣がモヤ〳〵と蒸上ツてゐた。其の奥の方に障子に映した火光が狐色になツて見えた。荒涼の氣が襲ふ。

家に入ツた。尚だ洋燈も灯さずにあツて、母親は暗い臺所で何かモゾクサ動いてゐた。向ふの家の臺所から火光が射してゐて、其が奈何にも奥深く見えた。其の狭い區域にも霧の色が濃に見える……由三は死滅の境にでも踏込むだやうな感がして、ブラ下げてゐた肖像畫を隅ツこの方に抛り出した。そして洋燈を灯した。微暗い火影は沈靜な……といふよりは停滞した空氣に漂ツて、癈頽した家のボロを照らした。由三は近頃になく草臥れた兩足を投出して、ぐッたり机に凭れかゝツた。そして眼を瞑ツて何んといふことはなく考出した。フト肖像畫の綾さんの姿が眼前にちらついた……何んだか癈物でも購ツて來たやうに思はれてならぬ。で眼を啓けて隅ツこに抛出した肖像畫を熟と見詰めてゐたが、ツト立起ツて引ツ摺ふやうに

肖像畫を取上げた。そして古新聞を被せたまゝでこツそり戸棚の奥に抛込むだ。

少時すると由三は、何か此う馬鹿を見たやうな心持で、久しぶりで肉の味を味はツた。して由三は何時まで經ツても肖像畫を戸棚から出さなかツた。

青空文庫情報

底本：「三島霜川選集（中巻）」三島霜川選集刊行会
1979（昭和54）年11月20日発行
初出：「中央公論」
1908（明治41）年12月1日号
※「つくね［＃「つくね」に傍点］込む」、「幾ら稼いだツて到底《とても》」は底本ではそれぞれ、「つく［＃「つく」に傍点］ね込む」、「幾ら稼いだツて到《とても》底」となっています。
※改行行頭の1字下げに関し、不統一と思われるところもそのままにしました。
※新字と旧字の混在は、底本通りとしてました。
※平仮名に対して、片仮名繰り返し記号「ヽ」が用いられた箇所は、底本通りとしました。
※1行開きの箇所は、底本では2行に8個の「＊」が配されています。
入力：小林　徹
校正：松永正敏
2003年12月6日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

昔の女

三島霜川

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/